思いが伝わること

私は中学３年生の時、卵巣嚢腫によって手術をすることになった。人生で初めての手術だ。診断されてから術日当日までは不安を感じることなく時間が過ぎた。当日の朝、担当医と看護師が私を迎えに来た。病室には母と姉がいた。母は不安そうな表情をしていて、姉は私を見守っていた。私は「いよいよか」と思うと同時に「本当に手術を受けるんだ」と感じ、今までなかった不安と恐怖が込み上げ、涙が止まらなくなった。その時誰よりも私に寄り添ってくれたのは姉だった。私と同じ目線になり、両手で私の頬を包み一緒に泣いてくれた。そして「大丈夫」と声を掛けてくれた。このおかげで私は勇気を出し、手術室へ向かうことができた。そして不安な手術も乗り越えられた。

この時の姉から「人に寄り添う」とは「思いが伝わること」でもあると感じた。私が手術を乗り越えられたのは、姉の思いが伝わったからだ。ただ「大丈夫」と声を掛けるだけでは思いは伝わらない。私と同じ目線になり、手の温もりや柔らかな質感が感じられ、さらには一緒に泣いてくれたからこそ、姉の「安心させたい」という思いが私に伝わった。思いが伝わるから「大丈夫」という言葉を信じられる。そして「私は１人じゃない」と思える。勇気が出る。そして最後には「寄り添ってくれた」に繋がる。「思い」の力は言葉より強く人の心に影響を与える。しかし「思い」は聞こえたり見えたりするものではなく、伝えることが難しい。だからこそ、触れたり一緒に泣いたり、あるいは、関わろうとする姿勢が大切なことだと感じる。何よりも、その人のために何か力になりたいという「思い」自体が最も大切なことだと考える。

私に「寄り添うこと」を教えてくれた姉は、今も私の心の拠り所となり支えてくれている。あの経験があったからこそ姉妹の絆はより強いものとなったように感じる。人と人との関わりによって成り立つ看護において、患者と看護師の絆や信頼関係は重要である。そのため、看護師の患者を助けたいという「思い」が伝わることは、患者の安心感や看護師への信頼感をもたらし、両者の関係をより良いものにしていくことができる。「思い」は両者の関係が家族であろうと他者であろうと、互いを強く結ぶ力をもっていると考える。

私は「寄り添うこと」とはどういうことなのか患者の立場で経験した。そして「思い」のもつ素晴らしい力も知っている。「人に寄り添う」とは「思いが伝わること」でもある。あの時姉が私にしてくれたように、次は私が看護師として、経験したことをもとに疾患と向き合う患者さんの力になりたい。思いが伝わるように、心の拠り所になれるように寄り添いたい。